

ローマ人への手紙 説教第6回 第5章成長のステップ

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいますが、そればかりではなく、患難さえも喜んでいますが。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です。ただし、恵みには違反のばあいとは違う点があります。もしひとりの違反によって多くの人が死んだとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれるのです。また、賜物には、罪を犯したひとりによるばあいと違った点があります。さばきのばあいは、一つの違反のために罪に定められたのですが、恵みのばあいは、多くの違反が義と認められるからです。もしひとりの人の違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです。こういうわけで、ちょうど一つの違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、一つの義の行為によってすべての人が義と認められて、いのちを与えられるのです。すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。

今日は、「この希望は失望に終わる事はありません」とあいさつしました。奇妙なことばですが、ちゃんと書いてありますね。この種の希望は、クリスチャン成長のプロセスのひとつなのですが、今日の聖書箇所は、成長の階段を一步一步昇っていくように書かれています。

1 信仰によって義と認められる

「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、」と始まりました。

2節の「導き入れられた」ということばは、英語では単純に「アクセス」と書いてあります。今、アクセスということばは頻繁に使われて、日本語のようになっていますね。私がメールアドレスをお知らせすると、皆さんは私のメールにアクセスできます。携帯電話番号を教えるなら、私の携帯にアクセスできる。私の家の鍵を娘に与えれば、娘はいつでも部屋に入ってくる事ができる。これがアクセスの意味です。

では、神様へのアクセスは何によって可能でしょうか。パウロは、「律法ではない。恵みだよ。信仰だよ。恵みによって、信仰によって、私達は神のそばに近づくことができ、神の前に行くことができるのだ」と言いました。

1節「ですから」と始まります。「1章から4章までお話ししましたね。ですから」という意味です。1章から4章まで勉強してきましたが、そこには義認についての原則、原理、或いは法則が書いてありました。人は信仰によって義と認められるのだということが、長々と書いてあった。ですから、私は日曜日毎に同じことを話しているような気がしますが、皆さんはどう感じているでしょう。「しつこいぞ、パウロ」と言うくらい、彼は「信仰によって救われるのだ。」「恵みによって。」「キリスト・イエスの贖いによって。」「その血によって。」「私達が払う代価によってではない。」「行いではない。」「信仰によって、恵みによって義と認められるのだ」と同じ話をしています。

この5章では次に進もうとしているパウロですが、再び、冒頭から「信仰によって義と認められた」と書いているのです。なぜ、彼はこれほどまでにこだわり、長々と、色々な例証を開いて、疑いようがないほどに、明確に、信仰によって義とされることを説明するのか。なぜなら、それが土台だからです。これが分からなければ、5章から16章まで色々な教えが書いてあるけれど、勉強しても無駄だよ。これからズレてしまったら、全ては意味がなくなるのだ。だから、信仰によって義と認められるという一つのことを、彼は明確に書かなければいけなかったのです。

たとえば、私達は目的地を定めて、方向に向けて、それに従って真直ぐ歩きたいのですが、ちょっとしたことでズレてしまう。初めに2ミリくらいズレる。そうこうしているうちに、1センチズレる。それが、7センチになって、今はたったの7センチだけれど、このままどんどんズレると、本当はロサンゼルスに行きたいのに、アラスカに行っちゃったということになってしまう。何百キロ、何千キロにもズレていってしまうのですね。

ですから、「信仰によって義と認められる」。そこから少しでもズレると、そのズレは回復困難なほどに大きくなってしまいますので、そのようなことがないように、パウロはくどいと思われるほど、明確

に、信仰によって義とされるということを4章かけて説明したのです。そろそろ前に進もう、しかし、もう一度思い起こさせなければというわけです。

ですから、私達の成長の第1番目のステップは、信仰によって義と認められることです。このステップを踏み外さないようにしましょう。

2. 神との平和

「信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」パウロはここにおいて、信仰によって義と認められて、神との平和を持っているのだと言います。私には、非常に奇妙に聞こえます。「え？今、パウロは信仰によって義とされて、神との平和を持っているのか。ということは、以前は神に対して敵対心を持っていたのかしら。神を憎んでいたのかしら。神を拒絶していたのかしら。そんなことはないよね。熱心な宗教者、律法を熱心に行う者だった彼は、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、神を愛していたに違いないし、そう告白していたに違いないよな」、と思うのです。

パウロは、パリサイ人の家庭に生まれ、良き両親から、宗教教育、家庭教育をしっかり受けました。両親の教育に答えるだけの才能があったし、能力があったし、意志も強かった。両親の期待を満たすことができ、期待以上のことをすることができた。その優秀なパウロが、神に対して敵対心を持っていたはずがないと思うのですが、パウロは、実は、外側は律法について落ち度のない者だったけれど、内面はぐしゃぐしゃだったのです。

彼は、やりたいと思うことができない。やりたくないと思う事をしてしまうという、精神分裂状態にありました。外側は立派に宗教を行い、律法を守り、品行方正な生活をしていたのですが、内面は「ああ、私は何というみじめな人間だろうか」。外と内がえらく違っていたのです。

どうして、こんなことが起こるのでしょうか。一つは、私達は律法を行おうとすると、きりがいいからです。「これだけ努力すれば神は喜んでくれるかな」と思うのですが、「まだ足りない。もっと頑張らなければ」。「これだけ頑張れば神は喜んでくれるだろうか」、「いや、まだ足りない、上には上がいる。もっとやんなきゃ」と思う。ですから、きりがいい。

律法の一つを破ってしまうと、全部を破ってしまうことになります。「むさぼるな」という戒めにパウロはどうしても勝てなかった。「盗むな、殺すな、姦淫するな、偽証をするな」、そんなのは全然問題ではなかった。「唯一まことの神を礼拝をする」「偶像をつくっちゃいけない」「安息日を守る」「主の御名をみだりに唱えてはいけない」そんなのは問題ではなかったのです。しかし、「むさぼってはいけない」これがパウロには、どうしてもできなかった。

「むさぼってはならない」それ一つを破ることによって、彼は罪意識を感じた。罪意識を感じると、神から嫌われている、神に拒絶されている、神から憎まれていると思うのです。私達の心というもの、自分を拒絶するものを拒絶するようにできているからです。

罪悪感がある。その心は、自分を嫌い、自分を拒絶していると思われる神を拒絶する。神様がパウロを拒絶しているのではなくて、彼がそう感じてしまう。神から愛されていない。拒絶されていると感じてしまうのです。

ですからパウロは、「律法によっては義と認められないのだ。律法を行うことによっては罪の意識が生じるだけなのだ」と言って、「実を言うと私は神に対して敵対心を持っていたのだ」と言ったのです。

もし、彼が神に対して敵対心を持っていなかったなら、クリスチャンを捕えて、牢に入れて、殺すなどということはできっこないですよ。神を本当に愛しているなら、神がお造りになった人々を愛するはず。神が自分のありのままの姿を受け入れてくれるのを感じていたならば、彼はクリスチャンも受入れることができたでしょう。議論をするかもしれない。間違いを正したいと思うかもしれないけれど、牢に入れたり殺してしまうなどということは、彼がいかにも内面的に分裂していたかを現わしていたと思います。

律法を行えば、行うほど、外側がきよく正しければ、正しいほど、彼の心はどんどん分裂が深くなっていったのです。ついに、耐えられなくなって、イエス・キリストを信じる。信じないと生きていけない。そして、イエス・キリストを信じたら、神との平和が来たのです。

放蕩息子の物語を思い出します。弟息子が帰ってくると、父親は大喜びするのです。ところがお兄さんが出て来る。お父さんは「一緒に食事しようよ。ダンスしようよ。音楽で楽しもうよ」と誘ったのですが、「お父さん、あなたは放蕩で身を持ち崩したあなたの息子が帰って来ると、彼のためには子牛をほふって、バンドを呼んで、パーティーを開く。しかし、あなたは私が友達と楽しむようにと言って、子山羊一つくれたことがありません」。

そして彼は言いました。「私はあなたの言いつけに、一度もそむいたことがありません」。彼は優等生で、まじめで、きちっとした好青年ですね。間違いなく。誰から見ても褒められるし、父親も自慢する。できたら私も本当はこういう子が欲しかったなと思わないわけではない。父の戒めに一度もそむいたことがないからです。勤勉でよく働かし、責任感が強い。

しかし、彼は、父親から愛されていると思えないのです。不思議です。父親の戒めを全部守って、一度もそむいたことがないのに。それならば、父親から愛されて、喜ばれていると思うに違いないのに。父親は、間違いなく、弟を愛して、喜んでいるのです。でも、兄は父親から愛されているとは感じられない。「どうして、弟を愛するの？」「どうして弟のために、バンドを呼んだり、パーティーを開くの？」「どうして弟の為には子牛をほふって、食事をするの？」「自分はみじめだ。愛されていない。こんなに品行方正なのに」、というのがお兄さんの心です。不思議ですね。

でも、日本において、「あんないい子が、あんなおとなしい子が、家に火をつけてしまったとか、あんないい子がお父さんにナイフ刺しちゃった、バットでなぐっちゃった。あんなにお父さんの言うことを聞く子が、信じられない」、ということがあります。不思議です。私達は、自分の良い行いによって人を喜ばせようとする、人を喜ばせることができるとは思えなくて、かえってその人から拒絶されていると感じ、それでその人を拒絶してしまう。「こんなにやっているのに、憎らしい」となってしまう。パウロも全くそのようでした。

ところが、信仰によって義と認められ、神様の恵みにより、イエス・キリストの血によって罪が赦され、罪がきよめられた。その時に、彼は初めて、平和、平安というものを経験することができたのです。

ピリピ人への手紙で、パウロは「人のすべての考えにまさる神の平安』と言っています(ピリピ 4:7)。人間の能力では決してできないような、圧倒的な平安をパウロは体験するようになりました。ローマの牢屋に入れられているのに、どうして自分にはこんなに平安があるのか。背中に鞭が与えられているのに、どうして私にはこんなに平安があるのか。人知ではとうてい測り知る事のできない神の平安です。これが、セカンド・ステップです。

3. 未来の希望

「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」三番目のステップは、未来の希望です。

私達は、死後の世界、死後の栄光に希望を持っています。私達は、救われたその瞬間に、天国への切符がもらえて、天国の希望が私達の希望になってくるのです。

パウロは、この栄光をはっきり見ながら生活していました。だから、「今の時の軽い患難は」(Ⅱコリント 4:17)と言ったのです。パウロ自身は「今のこの時の暫くの軽い患難」と言うのですが、Ⅱコリント 11:24 から読んで見ると、「背中に 39 回の鞭を受けて、背中がただれているんだよ。それだけだよ。軽いよ」「ええ？それが軽いの？」「牢屋に叩き込まれて 3 年」「私だったら 1 日でも気がおかしくなってしまう」「石で打たれて、殺されかけた。これは軽い患難だよ」「どう見たって、軽いとは思えないのですが」「いや、後に来る、測り知れない、重い、永遠の栄光と比べると、軽いんだよ」彼は天秤にかけて比べました。そして、後に来る、測り知れない、重い、永遠の栄光を見ていたので、今のこの患難が、「ただ暫くの、軽い患難」に見えたのです。

これは面白いな、と思います。何と比較するかです。どうせ、苦しんだって、5~6 年で「あばよ、さよなら」と天国に行くのだ。確かに今、辛いこと、苦しいことはある。しかし、暫くの間だ。5~6 年か、12~13 年か。そしてこの世に「さよなら」と言った時に、永遠の天国が待っていて、そこには主イエス・キリストがいて、それはパラダイスなのだ。実を言うと、パウロは「俺、見ちゃったんだよ、そのパラダイスを」ということです。

恐らく、ルステラにおいてでしょう。パウロはそこで迫害に会って、皆が石を投げました。大きな石を両腕で抱えて、パウロに投げつけたのです。そしてパウロは死にました。脈もないし、呼吸もしていない。死体は城外のゴミ捨て場に捨てるといことで、人々は両足を抱えて、パウロのからだを引きずって行って、ゴミ捨て場に持って来ました。クリスチャンが後からついてきて、パウロのからだを囲んで、「悲しいな。どうしよう」とするとパウロがひょっこり起き上がって、「さあ、町に戻って福音を伝えよう」と言ったのです。

パウロは、「私はそれが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです」と言っています。だから本当に死んでしまったのか、気絶していたのかわからないのですが、私の意見では、パウロは一度死んで、臨死体験をして、それからまた起き上がったのだろう。1 時間くらい死んで、それからまた生きたのだろうと思うのです。そうでなかったら、石を投げられ、気絶して傷だらけの男が、目が覚めたからと言って、「さあ」とスタスタ歩いて、町に入って福音を

述べ伝えるようなことはできないでしょう。でも、一度死んでよみがえった、新しいからだなら、それは可能だと思うのです。

はっきりしているのは、パウロは第三の天、パラダイスに引き上げられて、天国の光景を見、人が聞いてはならないような、聞く事の出来ないようなことばを聞いたことです。その天国の栄光と比べると、今のこの時の暫くの軽い患難は、取るに足らないと言ったのです。ですから天国はパワフルですね。「今の苦しみは大した苦しみではないよな」と感じるわけですから。

パウロは「幻を見たことに安住してはいけない(コロサイ2:13)」と言って、この話も14年間、誰にも話さなかったし、この時も、この話をしたかったのではなくて、「キリストが私の弱さの中に完全に宿る。弱い時にこそ、強い」ということを言いたかったので、お話したのです。

私達にも、天国の栄光が与えられています。それを見ながら生きていきたいですね。

4. 患難さえも喜んで

1. 信仰によって義と認められ、2. 神との平和を持っている。3. そして、神の栄光を見て喜んで。そして4番目は、患難さえも喜んで。患難を通して神に近づくのだ。患難を通して悔い改めるのだ。患難を通してきよめられるのだ。患難を通して磨かれるのだ。患難を通して成長するのだ。だから、患難を喜ぶのです。

5. 忍耐を生み出す

特に、どの部分が成長するのかというと、第5番目のステップは、忍耐です。患難が忍耐を生み出す。

背中から追い風が吹いてきて、順風満帆な時には、忍耐は生み出されません。100m競争なども、風向きが問題です。「今日は追い風だから、新記録が出るかもしれない」と解説者が言いました。野球のホームランも「風のおかげでホームランになりましたね」「ホームランになるはずだったのに、向かい風でフライアウトになってしまいました」と風の影響があるのです。絶えずそよ風が後ろから吹いて、後押ししてくれたら人生は楽なのですが、しかし、それでは忍耐力はつきません。患難があつて、忍耐がつくのです。

ひとりの若い牧師が、自分の牧会が困難で失敗しているのは、忍耐がないからだ気がついた。そこで、年配者の尊敬する牧師を思い出して、彼がすばらしい伝道をしているのは忍耐があるからだ。按手のお祈りをしてもらおうと思った。「先生、私は忍耐力がないので、伝道がうまくいきません。どうか、忍耐が、今すぐ与えられるように、手をおいて祈ってください」と言った。牧師は「愛する主よ。どうか、この兄弟に、夫婦の問題、子どもの問題、仕事上の問題、健康の問題、難しい問題を今すぐたくさん持ってきてください」と祈ったら、若い牧師は手を振り払って、「私が欲しいのは患難じゃなくて、忍耐なんです」。すると「だから、お祈りしたんだよ。患難がなければ、忍耐は生まれないんだよ」とその牧師は言うのでした。

私は、ある信徒を忍耐深いな、と尊敬しています。「どうしてこんなに忍耐深いのだろう」と思うのです。私自身は、忍耐がない男ですから。ある日その人に「忍耐深いですね」と言ったら、「とんで

もありません。私は短気で、忍耐がなくて困っているんです」と答えられたので、びっくりしました。「これほど忍耐がある人」と思っても、本人は「忍耐がない」と思っているのです。

「生まれつき忍耐のある人は手を挙げてください」と言って、「はい」と手を挙げる人は、恐らくないでしょう。待つのが苦手、待つのは苦しいと、ほとんどの人が思っています。

忍耐があるか、どうかで、大人か、子どもかの見分けをすることができます。大人は忍耐があります。20歳になったから大人であるとか、40歳ならば大人とは、聖書は見ません。忍耐のある人は大人、忍耐のない人は子ども、と見るのです。

そもそも、忍耐がなければ、何の意味あることも成し遂げることはできません。学業であろうと、仕事であろうと、趣味であろうと、教会生活であろうと、何であろうと忍耐がなければ立派なことは完成させることができないのです。

おもちゃ売り場で2歳の男の子が、ひっくり返って、「ママ、これ欲しい、欲しい」と言う。「いいわよ。買ってあげるわよ。クリスマスがきたら」と言っても、子どもには全く意味がありません。今、買ってくれないと意味がないのです。子どもは待てません。今欲しい、と、だだをこねる。幼稚だから。

お父さんが3歳の息子に「来週の土曜日、お休みだから、ディズニーランドに連れて行ってあげよう」と言うと、「ああ、嬉しい。ミッキーマウスだ」と部屋に行って、最高のシャツを着て、靴をはいて、「お父さん、行こう」「どこ行くの？」「ディズニーランド」「でも、来週の土曜日、わかった？」「わかった。じゃあ、行こう」となりますね。

子どもには時間の観念がない。やるのなら、今やりたい。今行きたい。でも、大人になると、人生はそうはいかないのだということを、学ばざるを得ません。そして、尊いものは、獲得するために必ず忍耐が要ることを知ります。忍耐なくして獲得するものは、大したものではないのです。

私は、娘から、忍耐をたくさん学びました。忍耐ということばに正面衝突したのは、娘が生まれてからです。それまで、私は自由奔放に生きていました。結婚しても、妻は適当に言うことを聞いて、合わせてくれました。でも、娘が生まれたら頭がパニック、てんやわんや、何が何だかわからなくなって、自分のライフスタイルが全く変えられてしまいました。子どもは最もすばらしいものですが、かわいいかわいいと言いながら、次の45年間は、かなりの忍耐と患難です。

ですから、とてもすばらしいもの、貴重なもの、価値のあるもの、それは、私達の忍耐を試すのです。私達は忍耐深さというものを身につけていきたいものです。

6. 練られた品性

次に、6番目のステップは、練られた品性と書いてあります。忍耐が進むと、それは練られた品性になる。練られた品性というのは、英語ではキャラクターと言い、しぶといといういみです。粘り強い。いざとなった時に強い。逆境に強い。困難の時に強いということです。

メジャーリーグのポストシーズンゲームで、リーグチャンピオンシップが行われましたが、そのニュースを見て驚きました。ペドロ・マルチネスがピッチングをしたのです。20年前から、私が知っている投手です。ドジャースにいた時代があって、今恐らく彼は40歳くらいです。ドジャースは、彼はいいピッチングをしているけれど、背が小さいし、細くて、からだが強くないからと、放出してしまっ

た。ボストン・レッドソックスが彼をとって、何回も最高の賞を取るのですが、さすがに高齢で、ボストンからメッツに行き、活躍は全く聞こえなくなりました。けがなどで引退し彼はメジャーリーグを辞めたのですが、何と今年途中復帰して、フィリーズに入り、西地区勝者ドジャーズに投げて、手玉に取って、打たせない。ゼロ点。ヒットも打たせない。私は、すごい人だな、このペドロ・マルチネスは、と思います。怪我があったり、病気をしたり、去年も、今年も活躍できなかったのに、この最後のいざというところで、相手のチームを手玉に取っているその姿です。

解説者は「この男はキャラクターがある」と言います。いざという時に強い。いざという時にしぶとい。逆境に強い。負けているのに、逆転してしまう。或いは、いざ、一番厳しい時にヒットが打てる。そういう人が「キャラクターがある」「しぶとい」と言うのです。日本語でも「しぶといバッター」「しぶといピッチャー」と褒めますね。それが、忍耐が生み出す練られた品性です。ヤンキースの松井秀樹選手は、そのマルチネスから2本もホームランを打って、最高殊勲選手の栄冠をえましたが、彼も最もプレッシャーのかかる状況で力を出した「しぶとい男」です。

7. 希望

そしてその練られた、しぶとい、逆境に強い、いざとなった時に光り輝く品性。いざ、厳しい時になって本領が発揮できる練られた品性は、希望を生み出すと知っているパウロは言います。

ですから、希望が第7番目のステージになります。

練られた品性が希望を生み出す。そしてこの希望は失望に終わることがない。棚からぼたもちが落ちてくればいいな、宝くじが当たればいいなという希望ではありません。練られた品性から生まれるものが希望で、この希望は失望に終わらない。なぜなら、私達に与えられた聖霊によって、神の愛が私達の心に注がれているから。

なぜ、この希望が失望に終わらないのか。

私は長い間、希望というのはわけがわからないと思っていました。信仰については、よくわかる。愛については、よくわかる。でも、希望については、昨日あんなにカラフルで、原色のように鮮やかなだったのに、24時間経ってしまうと灰色になっている。昨日、ディズニーランドで買う風船のようにふくらんでいたのに、24時間経っていないのに、今日はベツツチャンコ。どうして、こんなに希望は変わり易いのだろう、移ろい易いのだろう、どうしてこんなに変わってしまうのだろう。希望って本当にあてにならない。だいたい、ほとんどの希望は失望に終わってしまうではないか。

多くの人達は、落胆に疲れて、落胆しない方法を考えるのです。そして多くの人を選ぶ道は、希望を持たないことです。希望を持たなければ、落胆しない。何も考えないで、まじめに生きていればいいじゃないかと言って、多くの人々が、多くのクリスチャンも、「希望よ、さよなら」というのが平安の道だと結論を出す。

神の愛と信仰の関係は分かり易いです。神は愛して、御子イエス・キリストを送ってくださった。御子イエス・キリストが死んでくださった。信じるなら、救われる。ああ、そうだ。神の愛と信仰はこうやって結びついているのだ。

信仰と希望というのも、私はよくわかっていて、信仰は望んでいることがらの確信だ。信仰と言うのは希望を実現していく力なのだとわかる。たとえば、私は「牧師になりたい」という希望を持ったから、それを信じることによって実現しました。

分からないのは、神の愛と希望がどういう関係にあるかだったのです。長い間わかりませんでした。この聖書箇所に至るまで、パウロは一度も「神の愛」ということばを使ってきませんでした。旧約時代には神のあわれみ、慈愛があったとは言いました。Loving kindness ということばですが、アガペーのことではありません。ここで初めて、彼は「神の愛」ということばを使うのです。希望と関わりを持って神の愛が登場するのですが、この神の愛と希望とはどんな関係があるのだろうか。

希望というのは、何か暗闇の中でろうそくの火が燃えているというイメージがあります。窓が閉まっているのに、隙間風が入ってくると、燈心がゆらゆら揺れて、「消えちゃう、消えちゃう、ああ消えちゃった」と思うとまたぱつとついて、「ああ、消えてなかった」また数分経つと、また「消えちゃう」「ああ、消えてなかった」やっぱり希望って、はかない。あてにならないように感じますが。

イスラエルでは、今日でも3ドルか5ドルくらい出すと、土の器を買うことができます。日本の急須がペチャンコになって蓋が無いような形です。電気が発見される前は、その土の器にオリーブ油を入れて、燈心を投げておきました。火をつけると燈心がオリーブ油を吸って燃えます。燈心が絶えずオリーブ油を吸収して、オリーブ油によって燃え続けることができるのです。

パウロは、聖霊、旧約聖書では喜びの油というのが聖霊の概念ですが、この喜びの油が神の愛を私達に供給すると、私達の希望は燃え続けるのだと言ったのです。私達が社会的な現況を見たり、今の状態を見たり、自分の夫を見たり、子どもを見たりすると希望が沈んでいくのですが、もし、心を開いて、聖霊の油によって神の愛が供給されていたら、どんなに難しい状況にあっても、希望は燃え続けることができる。希望の食べ物、愛だ。そしてその愛は、聖霊によって与えられるのだ。このようにして希望というものはあるのです。現状を見たら、希望は消えてしまうけど、聖霊の愛を受けるなら、どういう状況にあっても、燃え続け、失望に終わる事はないと説明しているのです。

8. 神の愛

この愛の説明を続けます。6節。「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。」

そうですね。正しい人のために死ぬ人はほとんどいません。「あの人は正しいけど、ちょっと冷たいのよね。近寄りたくない。恐いのよ」ということで、義人のために死ぬ人はほとんどいないでしょう。でも、情け深い。恩がある。困った時に、助けてくれた。そのような情け深い人のためには、進んで死ぬ人はいるかもしれません。現代は、あまり死ぬということがありませんから、どうかわかりませんが、江戸時代とかには人のために死ぬ人が、日本においてもたくさんいたのです。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」神様の愛が明らかになった。これに対しては疑うことができません。「なぜなら、私達がまだ不敬虔、不信者、そして罪人であったときに、キリストは私達のために死んでくれたからです。この神の愛を疑うことはできないよね、とパウロは言うのです。

神様が「平野耕一よ。わたしはお前を愛しているよ。ハンサムだし。皮膚はすべすべしているし。スタイルはいいし。足は早い。髪の毛は真っ黒でふさふさしている。だからお前を愛しているよ」と言われたら、私は恐ろしくて、心配になりますね。じゃあ、髪の毛が白くなったら、どうなる。髪の毛がなくなったら、肌が皺だらけになったら、ぴっこをひくようになったら、神様から愛されないのだろうか。「お前は優秀だから、お前は正しいから愛する」と言われた時に、私達は不安になるのです。

これはパウロの陥ったジレンマです。「私は正しければ愛される」と思った。ところが、99%正しくても、1%間違っていると正しくないという結論ですから、緊張感でいっぱいです。正しくなければ愛されない。だから、自分は優秀だから、〇〇大学に行ったから、〇〇企業に入ったから愛されると思うと、それでは落第したら、どうするの？〇〇企業で大失敗したらどうするの？途中でうつになったり、途中で怪我をしたり、大学を卒業できなかつたら、どうするの？そういうことって、人生大いに起こります。

でも、そうではなかった。パウロは知りました。神は、あなたがまだ罪人であった時に、まだあなたが弱かった時に、まだあなたが不信心だった時に、あなたを愛した。神はあなたのありのままを受け入れたのだよ。わかる？あなたは愛されているよ。だから、この神の愛が明らかにされている。もし、私達が心を開いてこの神の愛を吸収していくなら、消えそうな希望でも燃え続けることができるのだと、パウロは言っているのです。

9. 神を喜ぶ

最後の段階は、11節「そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」

パウロは神を喜べるようになりました。律法の下にいた時、自分の正しさによって神に愛され、神に受け入れられようとした時には、神は嫌いだった。神を喜べなかった。神が恐かった。神は近寄りたくないお方だった。しかし、イエス・キリストによって和解させられた今は、神を喜ぶようになった。これが最終段階です。

私達の信仰の最終段階は、神を喜ぶことです。神様と一緒にいることが楽しい。神様と一緒にいる事が一番楽しい。愛というのは、一緒にいることが楽しいということです。一緒にいたい。一緒にいることが嬉しい。一緒にいて満足だ。一緒にいて会話をするだけで、心が溢れてくるんだ。

それは、神様の祝福は嬉しい。しかし、もっと嬉しいのは神と一緒にいることです。神様が助けしてくれることは嬉しい。でも、神様が私と一緒にいるなら、一番嬉しいのです。その境地に達する事

ができるなら、私達は一日 24 時間、一年 365 日、ぶっ続けで楽しむ事ができます。神様が楽しい。神様を喜ぶのです。

パウロは、信仰によって義と認められると、いずれ、そこまで成長していく。神と一緒にいるのが一番となる。パウロは、このからだが生んで、神とともにいることが一番いいのだと言いました。それが一番すばらしいのだ。神と一緒にいたい。そして、神と一緒にいることが喜びなのだ、そこにまで私達の信仰の境地が達するといいなと思います。

10. ひとりの人イエス・キリストによって

最後に、パウロは、イエス・キリストというユダヤ人が十字架につけられたことが、どうして 2000 年後、地球の反対側にいる私に関係があるのだろうか。十字架によって救われると言うけれど、だってイエスは 2000 年前の、地球の反対側の人じゃないか。どうして、現代の日本人の私と関係があるの？という質問に答えています。

鍵のことは「ひとりの人」です。ひとりの人、アダムによって罪がこの世に入り、罪によって死がこの世に入ってきた。私達が罪を犯したから罪人ではなくて、ひとりの方の罪によって、罪が私達の中に入り、私達は罪の中に生まれてしまった。アダムが罪を犯して、アダムが罪を犯した影響が全世界に広がって、地球の反対側に住んでいる私も罪人として生まれたのだ。けれども、それはひとりの方アダムが罪を犯したから、その罪の影響、或いは罪の支配の中で、罪が入ってきたので、死が入ってきて、死が全人類に広まってしまったのだ。

そして、もうひとりの方、もうひとりのアダム、セカンド・アダムと呼ばれるイエス・キリストが来て、この方が私達の罪のために十字架で死んでよみがえってくださった。

アダムが私達に罪と死の支配を与えたように、イエス・キリストは信じる者に、恵みといのちの支配を与える。私達はアダムの影響を受けて、罪人として生まれてきます。日本人でも、2000 年後でも、6000 年後でも。同じように、イエス様は 2000 年前にエルサレムで死んだ。そして、よみがえった。それは全人類に影響を与えるのだ。強制されるものではないけれど、もしそれを受け入れるならば、私達は恵みによって、救いに預かる、いのちに預かるというのです。

12 節から読みます。「そういうわけで、ちょうどひとりの方によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です。ただし、恵みには違反のばあいとは違う点があります。もしひとりの違反によって多くの方が死んだとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの方イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれるのです。また、賜物には、罪を犯したひとりの方によるばあいと違った点があります。さばきのばあいは、一つの違反のために罪に定められたのですが、恵みのばあいは、多くの違反が義と認められるからです。もしひとりの方の違反により、ひとりの方によって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの方

イエス・キリストにより、いのちにあつて支配するのです。こういうわけで、ちょうど一つの違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、一つの義の行為によってすべての人が義と認められて、いのちを与えられるのです。すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」

二つの鍵のことばがありました。一つは「ひとりの人」、もう一つの鍵のことばは「支配」です。

アダムというひとりの人が罪を犯したら、全人類が罪と死の支配下に置かれてしまった。しかし、イエス・キリストを信じる者は、恵みといのちの支配の下にいるというのです。

よく「平野先生、今日のメッセージは恵まれました」と言ってくれる方がいて、「どういうことが起こったの?」とお聞きすると、「先生のお話を聞いたら、何か心の中が暖かくなって、頭の中がピカピカ光ったんです」。それもすばらしいことです。

恵みというのは、私達が恵みにすっぽり包まれている。恵みの支配下にある。恵みに覆われている。私達の人生、私達の毎日、私達のすべては、恵みによって支配されているのであって、「何かここで感じました」というレベルではないのです。私達は、圧倒的な恵みに恵まれているのです。何から、何まで恵みによって支配されているのです。

すばらしい世界です。

今、私達は聖餐にあずかろうとしています。これは、イエス・キリストの恵みを思い起こすためにする儀式ですね。イエス様が弟子達にパンとぶどうを与えましたが、その時と同じように主がここにおいでくださって、私達にパンとぶどうを与え、イエス・キリストの贖いの恵みを私達の心に深めてくださいますように。

愛するお父様、感謝をいたします。信仰によって義と認められた私達には、良きものが連続して起こります。神との平和、天国への希望、患難を乗り越える力、忍耐が増してゆき、練られた品性ができ、希望が生まれ、神の愛が注がれ、そして私達は、神を愛する、神を喜ぶという世界に入ることができます。どうか、私達がすくすくと信仰の成長を見る事が出来るように助けてください。

これから聖餐に預かります。これはイエス・キリストがアダムによるのろいを断ち切った、アダムののろいをぶっ壊した、その代わりに私達に祝福を与えてくださったことを感謝する儀式です。どうか、感動をもってパンとブドウ液をいただくことができますように。